

國學院大學學術情報リポジトリ

デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平藤, 喜久子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000587

「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

プロジェクト責任者 平藤 喜久子

1. プロジェクトの概要

本プロジェクトは、2016年度から2018年度まで実施された「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」の後継的な位置づけのプロジェクトとして2019年度にスタートしたものである。

プロジェクトを中心に研究開発推進機構全体で構築してきた「國學院大學デジタル・ミュージアム」(<http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/>)について、研究開発推進機構全体の情報発信の有機的連関を図り、日本文化研究所が蓄積してきた研究成果や学術資産、研究開発推進機構によって実施されている研究成果や各種のデータベース等をデジタル化し、主としてインターネットを通して国際的に発信していくものとして運営していくことが一つの大きな柱とされ、学内の学部・大学院で構築したデータベース等を横断的に公開することにも対応することを目指している。また、21世紀COEプログラム関連事業として構築したEncyclopedia of Shinto（以下EOS）を拡充させ、神道文化に関する国際的なポータルサイトの構築も引き続き行う。さらに神道および日本文化研究の基礎資料の翻訳、教派神道関係の収集資料の公開など、プロジェクト独自のコンテンツの充実も図ってきた。

デジタル・ミュージアムの機能を、広く大学教育において活用できるものとするための取り組みも行い、スマートフォンを使用した場合の利便性の向上や、動画配信のシステム構築を目指す。また、研究資産を宗教文化教

育の教材として展開させていくにあたっては、2011年に宗教文化士制度の運営を目的として発足した「宗教文化教育推進センター」と連携して行ってきた。なお、宗教文化士制度については、國學院大學も設立当初から参加し、神道文化学部、日本文化研究所の教員が運営に関わっているものである。

また、昨年度に引き続き古事記学センターとは古事記の英訳の作成の面でも協力関係を築いている。

2020年度の本プロジェクトのメンバーは次の通りであった。

[専任教員] 平藤喜久子、星野靖二、吉永博彰
[兼任教員] 黒崎浩行、シッケタンツ、エリック、藤澤 紫

[客員研究員] キロス、イグナシオ

[ポストク研究員] 高田 彩、丹羽宣子、

[研究補助員] 大場あや、宮澤安紀、小高絢子、

[客員教授] 井上順孝、櫻井義秀、土屋 博、ナカイ、ケイト、山中 弘、ヘイヴンズ、ノルマン

[共同研究員] 今井信治、天田顕徳、ガイタニデイス、ヤニス、カドー、イヴ、塚田穂高、野口生也、ビュテル、ジャン＝ミシェル、牧野元紀、フレール、カール、村上 晶、矢崎早枝子

2. 2020年度の成果

2020年は、新型コロナウイルスの感染拡大というこれまでにない状況に見舞われ、本プロジェクトの活動も、当初の予定からさまざまな変更をせざるを得なかった。研究員の勤

務も在宅が中心となり、海外との交流や国内の研究者を招聘しての研究会もオンライン化や中止を余儀なくされたりした。

そのなかでも、専任教員、研究員の方々の多大な尽力により、予定していた研究活動の大半を実施することができたと思う。このことについてまず御礼申し上げたい。

(1) デジタル・ミュージアムの運営

まず、デジタル・ミュージアムの運営については、國學院大學博物館をはじめとする関係諸機関と協力し、新システムへの移行作業が進められた(本誌トピック5参照)。

新しいデジタル・ミュージアムは下記サイトでの運用が開始されている。

<https://d-museum.kokugakuin.ac.jp/>



現在も使い勝手などについて調整が続いているが、無事に移行できた。

(2) *Kokugakuin Japan Studies* 2の刊行

オンライン英文ジャーナル*Kokugakuin Japan Studies*のno.2については、2019年に天皇の御代替わりが行われ、元号が平成から令和へと変わったことを踏まえ、日本人と天皇を巡る次の3点の論文を英訳し、刊行した。

“Portrait of the Solitary Empress: Genmei Tennō in Man'yōshū” TOSA HIDESATO (*土佐秀里「孤独な女帝の肖像—万葉集が語る元明天皇—」『國學院大學紀要』56号、2018年1月、103-129頁の英訳)

“The Composition of the “Plum-blossom Poems” in Man'yōshū” ŌISHI YASUO (*大石泰夫「梅の花の歌の成立」『國學院雑誌』120巻10号、2019年3月、1-13頁の英訳)

“Japan’s Imperial Household Rites: Meaning, Significance, and Current Situation” MOTEGI SADASUMI (*茂木貞純「皇室祭祀の意義と現状」『國學院雑誌』120巻11号、2019年11月、274-293頁の英訳)

土佐論文は、女帝であった元明天皇の心の内について、万葉集に残された歌から理解しようとするものである。まさに女性天皇が議論されている今、古代の女性天皇のあり方を知ることは重要であろう。

大石論文は、令和という元号が万葉集の「梅花の歌」を典拠にしていた点に注目する。この「梅花の歌」とはどういった意図を持つものであるのか、そのことを探りながら、奈良時代に人々に愛されたとイメージされている梅についても改めて考察している。

平成の大嘗祭のときには、政教分離の観点などから批判的な議論が多くなされた。しかしながら今回の即位に伴って表立った批判は見受けられなかったようである。茂木論文は、平成の大嘗祭の際の議論を振り返りつつ、皇室祭祀の現代的な意義から論じたものである。

万葉集から現代まで、天皇に関わる三者三様の視点を取り上げ、発信することができた。
<https://www2.kokugakuin.ac.jp/oardijcc/publications/kjs-02.html>



(3) 宗教文化教育の教材研究の国際的展開

宗教文化教育の教材研究の国際的展開については、国際的な教材研究の展開のための研究会を実施する計画を立案していた。しかしながら新型コロナウイルス拡大のため、多くの研究者を招聘しての研究会の実施が困難と

なり、さらに海外の宗教文化についての情報を収集することもこれまで以上に難しくなっていました。

そこで、海外マーケティングの会社（株式会社TNC）と協力し、オンラインで宗教文化を学ぶワークショップを開催することとした（本誌トピック3参照）。インドネシアとタイをテーマとして、オンライン家庭訪問という形で行ったワークショップは、参加者も多く、企業と研究所との連携としては大きな成果を得ることができたと考えている。

（4）学生宗教意識調査の実施

教材研究の一環として、2020年は5年ぶりに学生宗教意識調査を実施することとしていた。

学生宗教意識調査とは、日本文化研究所が1995年から2015年まで12回にわたって「宗教と社会」学会の宗教意識調査プロジェクトと合同で行ってきたものである。

積み重ねられた調査は、若者の宗教意識、宗教リテラシーの現状を知る大規模調査として、研究者に活用されてきたばかりでなく、一般紙誌でも広く紹介されてきた。

2015年の調査から5年が経ち、学生の情報環境も変わり、天皇の御代替わり、平成から令和へという大きな変化もあった。あらためて学生宗教意識調査を実施する意義があると考え、下記の研究機関プロジェクトと共催で調査を実施した。

2020年学生宗教意識調査参加団体（研究プロジェクト）

- ・ 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所
- ・ 「宗教と社会」学会・宗教文化の授業研究プロジェクト
- ・ 宗教文化教育推進センター
- ・ 科研費「日本宗教教育の国際的プラットフォーム構築のための総合的研究」（基盤

研究（B）研究代表・平藤喜久子）

・ 科研費「高齢多死社会日本におけるウェルビーイングとウェルディングの臨床社会学的研究」（基盤研究（B）研究代表・櫻井義秀）

これまでは質問紙を教室で配付し、回答してもらった形であったが、2020年はオンライン授業となったこともあり、教員が学生にGoogle formのURLを知らせ、学生が任意で入力するというスタイルで行われた。

回答者数は、減ってしまったが、とくにジェンダーについての回答では、注目すべき変化を認めることができ、今後調査結果のさらなる分析が待たれるとともに、研究への活用に期待したい（本誌トピック6参照）。

（5）国際研究フォーラムの開催

日本文化研究所全体の催事としては、国際研究フォーラム「見えざるものたちと日本人」を企画した（本誌トピック1参照）。

2020年は、新型コロナウイルスの感染拡大という、誰もが体験したことのない出来事に翻弄された一年だった。新型コロナウイルスは、だれも肉眼で見たことはない。まさに現代の見えざるものである。その見えざるものに対抗するため、われわれはお札のようにマスクをし、呪術のように手を洗う。自分や家族が感染したら、忌み籠もりである。

それはこれまで人類が行ってきた、見えざるものへの恐れの実現と、変わらないもののように思える。わたしたち人類はさまざまな見えざるものと関わりながら歩んできたともいえる。

日本では、その見えざるものたちを神と呼んだり、幽霊、妖怪、鬼などさまざまな形で表現し、その交流の物語を作り出し、描き出したりしてきた。

現代の医者のように、陰陽師が活躍したり、僧侶が調伏したりすることもあれば、小泉八

雲のように解釈し海外に伝えた人物もいた。そうした見えざるものとの関わりを多角的に論じるため、講演会とワークショップを、Zoomを使用してオンライン上で行った。それぞれの内容は以下の通りである。

○ワークショップ1「見えざるものをエガク」

日時 2020年12月10日（木）
19：30～21：30

遠藤美織（江戸東京博物館）

「勸化本における地獄極楽と現世 — 『孝子善之丞感得伝』を中心に—」

渡邊 晃（太田記念美術館）

「浮世絵に描かれた〈みえざるもの〉」

○ワークショップ2「見えざるものをカタル」

日時 2020年12月16日（水）
19：30～21：30

廣田龍平（東洋大学）

「非人間の／による認識の存在論的造作」

ドリュー・リチャードソン（カリフォルニア大学サンタクルズ校、國學院大學国際招聘研究員）

「雪、妖怪、ゆるキャラ：北越雪譜と越後のアイデンティティについて」

○国際研究フォーラム「見えざるものたちと日本人The Japanese and the Realm of the Unseen」講演会

日時 2020年12月19日（土）
14：00～17：30

小泉 凡（小泉八雲記念館館長、島根県立大学短期大学部名誉教授）

「ラフカディオ・ハーンと『見えざるもの』の交渉をめぐって」

斎藤英喜（佛教大学教授）

「陰陽師からいざなぎ流へ—見えるものから〈見えない世界〉を探る技法」

アンドレア・カスティリオーニ（名古屋市立大学講師）

「湯殿山信仰における不可視性と秘密性」

コメンテーター

飯倉義之（國學院大學准教授）

藤澤 茜（神奈川大学准教授）

司会

平藤喜久子（國學院大學 研究開発推進機構 日本文化研究所所長）

本催事については、2021年度に報告書を刊行する予定である。

3. 2021年度の実施計画

デジタル・ミュージアムの運営については関連する各機関とも連携し、2021年度も継続して遂行していく。

また、デジタル・ミュージアムの展開のための独自のコンテンツの構築に関しては、ポータルサイトの充実や、KJSのno.3の刊行、そして2020年度に実施した学生宗教意識調査を教材として活用するための研究を行う。神祭具DBについても構築を行っていく。

新型コロナウイルスの感染状況によっては、予定の変更もありうるが、国際研究フォーラムなどこれまで続けてきた催事については、感染症対策を図りつつ、2021年度も充実したものとなるよう努めていきたい。